

大阪くらしの今昔館所蔵品を巡る

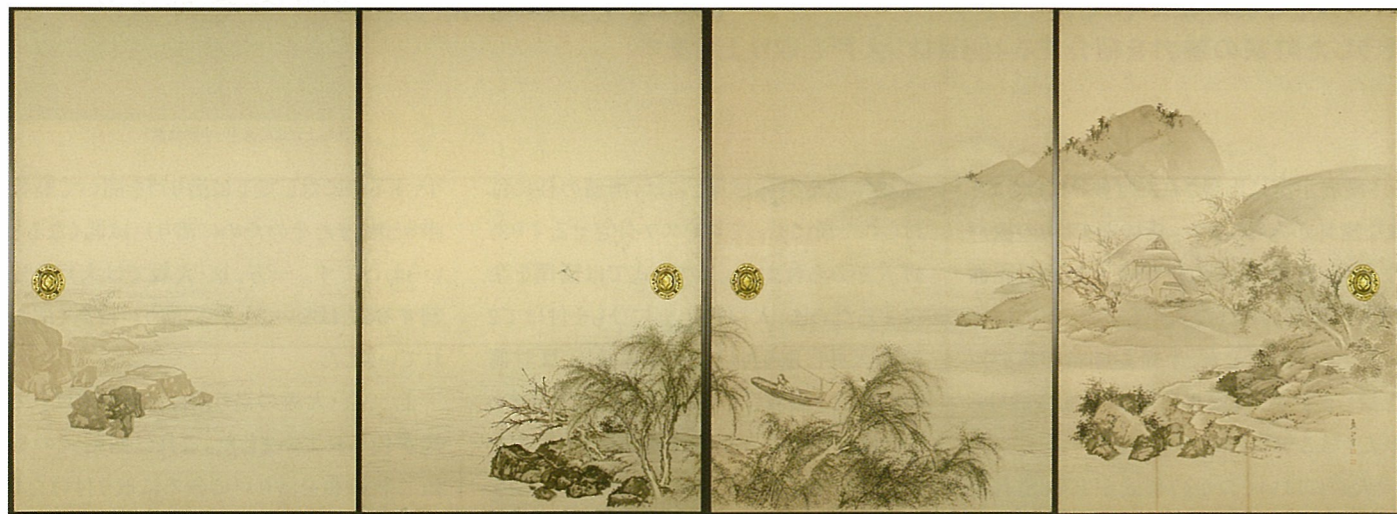
# 大坂画壇の絵師たち

## 8. 中井 藍江

大阪くらしの今昔館には近世の大坂画壇の絵師による作品が所蔵されています。  
それらの中から注目すべき作品を紹介していきます。

中井藍江(明和3~天保元、1766~1830)は名を直または真、字を柏養または子養といい、俗称を養清といいました。はじめ菟関月に画を学び、のちに雪舟や中国の李龍眠・牧谿の画を研究し、さらに四条派の写生風も加味して、独自の画風を完成しました。また、中井竹山に詩文を学び、木村兼葭堂とも交流がありました。山水人物をよくし、文化元年(1804)刊『播州名所巡覧図絵』、文化5年刊『かはごろもの記行』、文化9年刊『吾妻乃都登』などに挿絵を描いています。住まいは寛政頃は銭橋南、文化以降は伏見町心斎橋東にあり、生玉の覚円院(明治に廃寺)に葬られました。

### 「林和靖図」襖 (紙本墨画淡彩 4面 各171.2×117.0cm)



林和靖図

襖4面にわたり、湖面の広がる風景を描いています。画面の中ほどに小舟にのる高士の姿があり、上空を舞う鶴を振り仰いで見えています。これは北宋の詩人、林和靖(林逋)を表しています。林和靖(968~1028)は銭塘(浙江省)の人で、西湖の孤山に隠棲し、20年間杭州の街に足を踏み入れませんでした。庵には300本の梅を植え、2羽の鶴を飼い、妻子をもたず「梅妻鶴子」すなわち梅を妻、鶴を子とする生活を送りました。日々小さな舟を西湖に浮かべ、詩を作り、諸寺を歴訪することを楽しみとし、

庵に客があると、留守を預かる童子が鶴を放ちました。林和靖は上空に鶴の舞う姿を見ると、急いで庵に帰ったとのこと。文人の理想的な姿として、古くから好んで絵の題となりました。

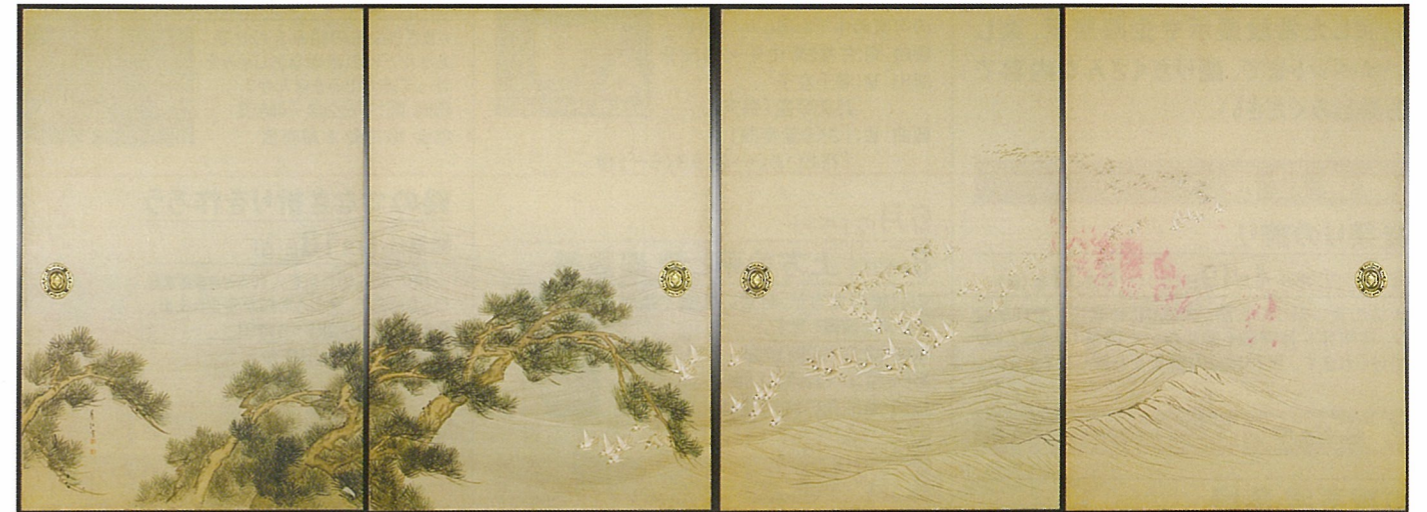
本図の右手に描かれた草葺きの家は林和靖の庵で、満開の梅が美しい早春の風景です。しかし画面中央の小島は新緑の柳に覆われ、季節は夏へと進んでいます。そして画面左手の岩場には芦が生い茂り、秋の到来を告げています。季節が静かに流れ、悠久の時間を暗示しているようです。

伝統的な漢画の画題でありながら、四条派ならではの明るさと情感が漂い、藍江の優れた画技を示す秀作となっています。



林和靖図 部分

### 「波に千鳥図」襖 (紙本墨画淡彩 4面 各171.2×117.0cm)



波に千鳥図

この図は左頁の「林和靖図」の裏面にあります。「林和靖図」が精緻な筆使いの楷体で描かれていたのに対し、本図は大まかな筆使いの行体の画法で描かれており、前者が上段、後者が次の間として描かれたことを思わせます。「林和靖図」が穏やかな湖水の風景であったのとは対照的に、本図は大きくうねる波と、群れ飛ぶ千鳥を配したダイナミックな海の風景です。波の描写は臨場感にあふれ、藍江の観察眼の鋭さを窺わせます。

波は左から右へと打ち寄せ、松は海から吹き付ける強い潮風のせいで、みな右側に傾いています。しかし小さな千鳥の群れは、はるか沖合から右へ左へと揺れながらだんだんと近づいてきます。千鳥は風に逆らって飛び、ついに松のすぐ側に迫っています。力強い姿が印象的です。長沢芦雪や森徹山など円山・四条派の絵師は、しばしば極端な遠近法をつけて鳥の飛来するさまを描きました。藍江の千鳥の群れもそれらの絵の影響をう

けたものですが、奇矯にならず穏健にまとめられており好感がもてます。

藍江の作品は今日いくつか知られていますが、南画風の山水人物画あり、細緻な名所図会あり、四条派風の動物画あり、と画題も画風もさまざまです。本図は左頁の「林和靖図」とともに、四条派風を強く窺わせるもので、藍江の画風の変遷を研究する上で、注目すべき作品といえるでしょう。

(岩間 香 摂南大学教授)

### 見どころ くら話 こんじかん

大阪くらしの今昔館が設計段階からこだわった展示の中身や、ふだんは気づかない展示の裏側をご紹介します。

## 「浪花の書肆と上方浮世絵」

書肆とは、今の本屋さんのこと。ただ現在の本屋と違うのは、版元を兼ねていたという点にあります。江戸時代に本を出版しようとする、販路を拡大するために三都(江戸・京・浪花)書肆などが版元となり、執筆料、彫り代、刷り代などさまざまな費用を分担していました。版木はそれぞれの版元で分担保管する「留め版」が行われていました。心斎橋界隈にはこうした書肆が軒を並べ、日ごろ用いる節用集から専門書まで何でもそろった町となっていました。

こうした書肆は、江戸と上方では決定的な相違が見られます。江戸では本と草紙類を扱う同業者がそれぞれ別の仲間(組合)を結成していました。当然のことながら書肆では本を、草紙屋では草紙・浮世絵などの商

品を扱っていたことになります。しかし、浪花はこの二つの仲間が分立せずに一つの仲間として成立していました。つまり、本屋の店先に本と浮世絵が並んで販売されていたのです。

江戸時代後期、浪花の書肆はなぜか留め版でばらばらになった版木の買い占めに走ります。本の再販は各版元の合意がないと再び世に出せません。よほど人気の高いものでないとなかなか再販されることはなかったのです。

また江戸時代の書肆は、新刊だけではなく古本も商っていました。浪花の本屋の店先は新刊本、古本、浮世絵など江戸には見られない品揃えであったことが想像されます。さらに浪花の版元が行った版木の買い占め



は、自由に再販できるという利点をもたらします。しかし、こうして貯め込んだ版木は明治という時代になり、新しい印刷技術の到来によってただの薪となってしまいました。ここに大阪人の大きな誤算と打算があったのです。この時以来、関西の出版界は低迷を余儀なくされます。

ミュージアムに再現した書肆は、浪花最後の華やかな天保初年に実在した本屋です。新刊・古書そして浮世絵を扱う店でした。店頭には上方でさかんに売り出された「上方役者絵」も並んでいます。

(明珍健二 花園大学准教授)